

## 母 栗林 晴 のこと

母、栗林<sup>クリバヤシ</sup> 晴<sup>ハル</sup>は父が池田良三郎、母ロクの男四人、女四人の兄弟の末子として、明治三十九年八月四日東京都淀橋区戸塚町四の八八三番地<sup>ハル</sup>で出生、戸塚第一尋常小学校から後に開校した戸塚第二尋常小学校に移り、第一回卒業生として卒業しました。(当時の同級生に高田馬場駅前の稲垣寝具店のおばあちゃん<sup>ハル</sup>が居たときいております。)高等科に進んだ頃、姪の落合の小母さんが女学校に進学するのを知り、親に泣いて頼んで自分も一緒に岩佐高等女学校(現在 佼成学園 世田谷区 当時は牛込榎町所在)に入学いたしました。ふたりで毎日、雨の日も風の日も戸塚から榎町まで歩いて通いました。諏訪神社から玄国寺の前をとおり穴八幡下から小倉屋前<sup>コクラヤ</sup>を通ってかよいました。当時の池田家は祖父良三郎が諏訪町の池田本家から明治三十年に分家、以来三十年あまり祖父母夫妻、母の兄姉たちの努力の甲斐あって、ようやく安定した生活のできる頃だったのでしょうか。唐辛子、茗荷もつくる典型的な近郊農家で、兄たちが神田の市場まで荷を運んでいたそうです。卒業後、岩崎家へ行儀見習いに行き、昭和四年四月父栗林 鶴吉と結婚、小倉屋の嫁となりました。義父 栗林 静助は諏訪の池田家から養子にきた人で、父と母はいとこ同士になります。

当時の小倉屋は郵便局を兼営していたり、使用人が多く、その上、父の長兄 松太郎が病氣療養中だったりして気苦労は大変なものでした。道路改正で家を建て直す話や義兄のことなどでたいへんな負担だっ

たようです。十一年に義父が、十三年に義兄が亡くなりました。十五年戦時企業統制令で酒屋を閉じ、父は酒類配給公団に勤め、母ひとり子どもを育てながら、店の半分を貸し、残りの半分で安兵衛という飲み屋を営業しました。この頃から日本は大変な時代に入って行くのですが、四人の子ども（繁子、敏子、昌輝それに生まれたばかりの慶江）を囲み安定した生活の日々でした。十八年に長女繁子が牛込女子商業に進学が決まった矢先、三女慶江を小児性の下痢から脳膜炎を併発して亡くしました。数え、わずか三才、かかりつけの中山先生のお留守で運の悪い日でした。同じ年の七月に次男健二が生まれて、背中に背負いながらも、慶江のことを思い出したようです。それからは同い年の子どもを見て、指を折る母の姿を見るようになりました。

あの頃の親たちは、みんなそうだったのでしよう。たまの休みの日、戸塚の実家を子ども連れで訪ねるのが、母のただ一つの楽しみだったようです。往きは穴八幡様から左に曲がって、お諏訪さま、玄国寺の前を通って池田の家まで歩いて行くのが常でした。騎兵連隊の門をすぎ、上り坂にかかると鶏を沢山飼っている家や野球の岡田源三郎さんの屋敷をすぎると、左側は鉄条網をはりめぐらした軍用地で切り通しになった急な坂道でした。途中に諏訪町の池田本家、大野の伯母さん、花屋の伯父さんの家もあったのですが、正月やお盆を除くと、自分の実家と八百屋の伯父さんの所に寄るだけでした。池田の家ではたいてい、ご飯をご馳走になりました。伯父さんが布に包んだ生地を足でふんで、鯰鮓うどんをうち、伯母さん特製の手作りのごまだれでいただいたことも、何度かあります。伯父さんは、ご機嫌なとき、落合の棒打ちうたや富士講のご詠歌をうたってくれました。当時、高田馬場駅の西側にバスの方向転換のためのターンテーブルがあり、発着所になっていました。帰りはここから、馬場下までバスに乗って帰る

のです。たまには、駅前にあつた小さなデパートで玩具を買ってもらうこともありました。この道順は晩年、足が弱くなってバスやタクシーを使うようになってからも変わりませんでした。戸塚（池田）のおとよさんと話しこんで遅くなり、晩ご飯をいただき私たちが店をしまう十時頃帰ることがよくありました。「魚屋の正ちゃんの、鯉やヒラメを煮たのが、叔母さんは大好きネ」とおとよさんに云われたことがあります。井戸端にとめた自転車の荷台で器用に魚をさばく正ちゃんや白い割烹着で、広い台所を切り回すおとよさんの姿が目には浮かびます。

八百屋の伯父（池田吉三）さんにも、たいへんお世話になりました。僕の初節句には「晴はらのはじめての男の子だから」と立派な鍾馭様をいただきました。物のない時代だったこと、上ふたりが姉だったため、洋服は従兄の善（善左右衛門）ちゃんのお下がりでした。英国製の生地で作ったオーバーや金ボタンの沢山ついた外套などがそうでした。それが、弟の健二、和彦までお下がりで、四度のお役にたつ、そんな時代でした。繕いものは母の夜なべ仕事で、手ぬぐいをかぶり遅くまで、針を運んでいたのです。朝はやくから、夜遅くまで、ご飯支度、掃除、洗濯その上、子育ての苦勞、何の機械もない時代の親たちはほんとうに忙しかったようです。

昭和十七年頃、戦争が激しくなり、お宮の御神輿やお寺の鐘までが金属供出で献納されて行くことになりました。お諏訪さまのお御輿も献納されることになり、その最後の渡御があり、母につれられて八百屋の二階から見物しました。善ちゃんの部屋には飛行機や軍艦のソリッドモデルが沢山あり、大事に飾られていました。伯父さんにねだって「善坊にはないしょだよ」と銀色に輝く飛行機のモデルを貰いました。おなじ頃、善ちゃんの兄の好直さんが海軍に出征していきました。土地の青年団、愛国婦人会、

在郷軍人会の人たちや子供らが幟を立てて駅までおくりました。一度、戸塚の勝民さんと母に連れられて横須賀まで面会に行ったことがあります。母は健二を背負い僕の手を引いて、長いこと省線電車に乗ってでした。好直さんが「・・・池田好直、面会にまいりました。」と水兵姿で大きな声で挨拶して、持っていた大きな「オハギ」を一口で食べました。どこかの酒屋さんの二階の座敷でした。五十年以上たった今でも甘い物が大好きな好直さんです。戦後も随分お世話になったのに「叔母さん、叔母さん」といつても盆暮れには必ず寄ってくる方です。

十九年、僕が国民学校入学、長姉繁子が大崎にある軍需工場へ学徒動員で行くことになり、秋には次姉敏子が学童集団疎開で栃木県上三川町に行き、面会へ行ったりするので母の世界は東北本線に沿ってひろがりました。二十年春、敏子は卒業のため帰京し、姉と同じ牛込区女子商業に入学しました。入れ替えに僕が集団疎開に行くことになりました。三月の下町の空襲のため、急遽一二年生でも親元を離れて疎開することになったのです。出発の前夜まで父と母はその支度に走り回ってくれました。昔の印半纏をほだいて洋服屋の高橋さんにたのんで、長ズボンに仕立てもらったり、八百屋の伯父さんの所に善ちゃんのお下がりを買って行ってくれたり、なかなか苦労したそうです。中学生になっていた善ちゃんは銭別にと漫画「のらくろ」を数冊くれました。疎開先の寮（栃木県上三川町の普門寺）では、これが僕の宝物になりました。このおかげで上級生たちにも可愛がられたことを今でも懐かしく思い出します。

当初、牛込区小涌谷戦時疎開学園が箱根で発足、栃木県一帯に拡大設置されて行きました。

無料ではなく、保護者の負担は月額一〇円で、追加の費用もあり、二〇円くらいかかったと聞いています。面会には一食につき米一合と一泊につき三円負担が必要でした。

五月二十五日、自宅が戦災で焼失、母は健二を背負い敏子と逃げたそうです。繁子が安兵衛の柁と過去帳を持って逃げ、いったんは現在の理工学研究所の下に掘られた横穴式の防空壕に入ろうとしたのですが、「他の町内の者はだめだ。」と断られて、母と妹を追って戸塚方面に逃げ助かったのです。この防空壕では喜久井町と早稲田町の人たち百人あまりが亡くなってしまったのです。父は警防団の消火活動を指揮して顔半分に近い火傷をおきました。

疎開先の栃木県で、子供たちは何もしりませんでした。ラジオなど聴かせてもらえませんが、説明は何もないのです。手紙も家族からの連絡もしばらくは来ません。みんな心配でした。栃木県でも空襲で夜中に避難することも多くなり、子供の力では何もすることはできませんでした。六月、しばらくぶりに面会人が見えました。梶屋さんと矢部さんのお父さんと、みんなに東京の様子を知らせに来てくれたのです。僕は「家は焼けてしまったけれど家族の皆さんは元気だよ。切符が手に入ったら面会に行く」と伝えられ、寺の本堂の裏で大福を一つ貰いました。大事に食べましたが、それは塩味でした。七月のはじめ、本橋さんと打林さんと母がやってきました。母は健二を背中に背負ってです。何も知らない健二はお寺の中を裸で飛び回ってキャキャと喜んでいきます。「面会にくるのは大変なことなの。切符は手に入らない、汽車は空襲で何度も止まる。その上、一食につき、米二合と食費を寮に払わねばならないので、皆さん来たくても、なかなかこれないのよ」と母はいい、栄養失調とブユに咬まれてきた僕のオデキを心配しながら、健二を背に帰っていきました。八月のはじめ父が来て「もう、ここまで来たら、日本中どこにいても同じだから、家族一緒にいたほうが」と東京へ連れ帰ってくれました。小金井と栗

橋で空襲にあい、とまった汽車から飛び降り、堤防の上を逃げ、大宮で電車に乗り換え、浦和の知り合いに一泊させて貰って、明るる日牛込高田町（牛込区高田町九、福島畳店の二階）の仮住まいにいたのです。だから僕は終戦を東京で迎え、その後の混乱をさけて、また寮へ戻ったことになります。付近は三軒むこうの桶屋の鈴木さんまでが焼け残っただけの見事な焼け野原で、馬場下には数軒の焼けトタンのバラックが建っているだけ、高橋の洋服屋の小父さんと小母さんは焼け跡でカボチャや茄子をつくっていました。

昭和二十二年新春、元の馬場下町に家を建て戻ることができました。町内では本建築の家は数軒目でした。三男の和彦が生まれたのは、この年の三月、この新しい家でした。暮れに長姉繁子が代々木深町の岩本栄吉のところに嫁に行きました。でも、すぐに健康を害し満十九才で亡くなりました。二十五年ようやく酒屋を再開することができました。

当時、酒類小売販売免許申請書を作ることは大変な作業なのに、母はひとりでこれを全部、毛筆で浄書したそうです。店はあげたものの、昔の得意先を訪ねても「あそこの酒屋さんには、配給時代お世話になったからネ」と云われて、なかなか買ってはもらえず、商売は大変だったのです。あちこちで無理な商売をしたようです。知人の中華料理店を経営している人から「酒を買ってやるから、借入金の保証人になってくれ」といわれ断りきれず、なつてしまいました。その人が倒産、貸し倒れと保証債務の二重苦のため、昭和三十二年に父が脳溢血で倒れた頃、家の台所は火の車、借金地獄でした。当時としては莫大な金額の借金でした。周囲のご支援と母や姉弟の協力でどうやら店の再建が軌道にのつたのは四十年代にはいつてからでした。私が聆子と結婚した四十一年には店の経営も、まだまだ大変な頃でした。

思ったように商売は伸びず店は老朽化してボロボロでした。台風の前などアチコチに釘を打ったり、雨漏りの始末で大変で、屋根の上にあがって手伝ってくれる問屋の外交さんもいる始末でした。

店をビルに改築できて二年後の昭和五十年に父を送りました。母も町の老人クラブや業界の旅行に出かけられるようになり、喜んで出かけたようです。孫たちに土産を買ってくるのが楽しみのようでした。九州に行った際、途中で具合が悪くなり、雲仙温泉まで迎えにゆきました。東京から長時間フェリーに揺られていったのが悪いのかと思っておりましたが、その後、伊東に行っても同じようなことがあり、このような団体旅行は、どうやら体力的に無理な年齢になってしまったようです。その後は、家族と出かけるのが、楽しみでスキーや潮干狩りにまで一緒に行きました。たまには、聆子の母も一緒でした。晩年、長野の善光寺に行きたいと、よく云いましたので、伊藤の母（聆子の母）と一緒に行き、志賀高原、万座温泉を廻ったのが、私とは最後の旅行になりました。この時、善光寺本堂の急な階段が上がりず、下でお参りしました。でも、参道のお店で数珠を買ったり、お蕎麦を頂いたりして、とても元気でした。その後

その八月には苗場にも聆子や敦子たちと一緒に行き、平成二年秋、起きあがろうとしてベッドに頭をぶつけ、軽傷をおいました。そのとき、CTスキャン等の検査も行い、何も心配はいらないとのことでした。十二月にはいつてもどうも様子がおかしいので、主治医の小西先生の紹介で国際医療センターに入院、肝臓癌と判明、わずか二週間の入院で亡くなりました。十二月三十一日早朝のことでした。

平成三年一月四日、十五才のときから通い慣れた、八幡様から左におれてお諏訪さま、玄国寺の前を通り、池田本家や自分の生家に別れをつけ、落合の斎場から旅立ってまいりました。